

北海道支所合同庁舎へ——経過と現状——

北海道支所

地質調査所北海道支所は、平成元年（1989年）8月8日、9日の両日、新しい札幌第1合同庁舎への本移転を終え、8月10日（木）から業務を開始した。

支所の旧庁舎（写真1）は、大正11年（1922年）農商務省札幌鉱務署の建物として建築されたもので、札幌で最初の鉄筋コンクリート建築物であった。昭和36年（1961年）に当時の札幌通産局から所属替された。室内は広く、天井は高く、煉瓦を張った壁は厚く、夏涼しく冬暖かい住心地良いものであった。古風な木造りの階段の手すりなど、風格あるこの建物は、博物館等として利用してもよいもので、28年にわたるここでの歴史を振り返るとき、とりわけ支所に関係した者にとって、今度の移転は、ひととき感慨無量であった。

1. 移転の経緯

その第一歩は、昭和58年（1983年）5月、北海道開発局から札幌第1合同庁舎新営（建替）予算要求の提出依頼があったことにある。その後、ただちに北海道財務局担当官による支所の視察があり、5月末にその予算要求基礎資料を北海道開発局長に提出した。同年6月には、連絡会議の折り地質調査所の本所に報告され、支所長から、直接、その概要の説明を所長を始め関係者に行った。

昭和59年1月に、第1合同庁舎の移転が新聞に報道された。同年2月に、札幌地区合同庁舎整備計画説明会が北海道財務局主催で、また、4月に関係担当者打合せ会議が北海道開発局主催で開かれた。7月に、支所からは入居に必要な基本資料を提示、引続き同月の担当者打合せ会議において、第1合同庁舎基本設計第一次案が北海道開発局管轄部から提出された。9月に、第二次案の提出、ヒアリングが続き、新庁舎内の各室の配置図が決った。

昭和59年12月、工業技術院総務部による支所移転に関する連絡会議がもたれ、関係者による全般的な討議が行われた。以後、支所では昭和61年7月、移転対策委員会から移行した「移転実行委員会」を発足させ、備品・図書、資料、標本・試料の小委員会を設けて実務に入った。一方、昭和61年11月から北海道財務局主催による「新札幌第1合同庁舎連絡協議会」が連続的に開催され、新庁舎内の運営面での細目にわたる協議が行われ、第9回の



写真1 旧庁舎からの移転作業

協議会（平成元年9月14日）で終了した。

支所移転実行委員会の仕事は、その最終段階の平成元年8月までの期間、移転案内状の発送から旧庁舎各室の整理、梱包、庁用備品の発注、移転作業へと展開された。この移転は、規模はちがうとはいふものの、本所の川崎、東京から筑波への大移動を思いおこさせるものであった（写真1）。

2. 新庁舎

昭和61年度に北海道開発局の設計発注、監理によって新庁舎の建設が始まった。新庁舎は、平成元年6月末に完成（写真2）、1ヶ月間の諸点検の後、7月1日に引渡された。その後、ただちに合同庁舎管理室を初めとする各官署の移転が開始され、7月上旬の北海道開発局に引続き、地質調査所北海道支所の8月8日、9日の両日の移転を含めて、8月13日に終了した。これに先だって7月14日にライラックの植樹式と新庁舎の講堂における落成式典及び祝賀会が盛大に行われた。

入居官署は第1図のように9省庁16官署（総人員約2,000人）である。庁舎の概要は、次のようになる。

敷地面積	11,649.09m ² (3,530坪)	
建物延面積	53,030.52m ² (16,070坪)	
基準階面積	2,385.45m ²	
建物高	73.3m	地上18階・地下2階・塔屋1階



写真2 JR札幌駅北口から望む札幌第1合同庁舎

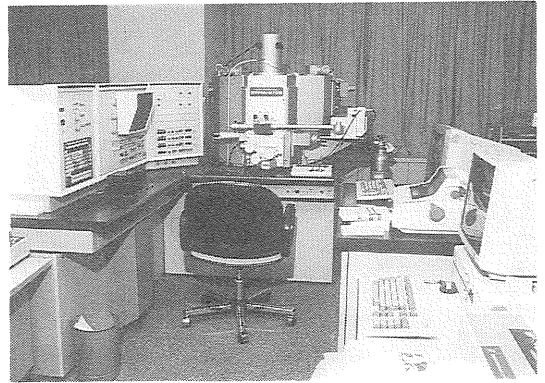


写真3 マイクロアナライザー室（3階）

入居官署

総 理 府	北海道管区行政監察局 北海道開発局
法 務 省	札幌法務局
大 蔵 省	北海道財務局 札幌政府刊行物サービス・センター
厚 生 省	北海道地方医師局 北海道地区麻薬取締官事務所
農 林 水 産 省	札幌統計情報事務所
通 商 産 業 省	北海道通商産業局 北海道鉱山保安監督局 工業技術院地質調査所北海道支所
郵 政 省	北海道電気通信監理局
労 働 省	北海道労働基準局 北海道婦人少年室 中央労働委員会事務局北海道地方事務所
建 設 省	国土地理院北海道地方測量部

第1図 入居官署一覧表

食堂・売店・郵便局・共済組合連合会診療所等の福利厚生施設も設置され、空調熱源は、札幌市地下鉄の廃熱回収利用及びヒートポンプボイラーシステムという画期的な方法による冷暖房である。

3. 北海道支所

北海道支所は、次のような階層に配置、入居している。

- 4階：地形研究室，地質標本室，会議室
- 3階：支所長室，庶務課，図書室，研究居室，光学・

EPMA（写真3）・堆積・鉱物・化学・X線・機器等の研究・実験室，電算機室，暗室など
 地下1階：試料調整（薄片・研磨片作製）室，岩石試料室
 地下2階：出版物保管庫
 支所の専有面積1,483.33㎡は、庁舎の5.2%（人員は1.0%）である。

地質標本室は、北海道に産する岩石・化石と鉱石，道外の標本，海外の標本及び一般鉱物標本並びにデスモスチルス復元骨格を展示（写真4）。ラベルも新しく統一され、壁面には各種地質図等が掲示されている。標本数は、北海道特産の各種標本（約500点），道外・外国標本（約180点），標準鉱物標本（約170点）で、ガラスケースも新しくなった。道内標本の鉱石では、数少ない稼行中のひとつの豊羽鉱山産標本の“生々しい”鉱石など貴重なものが展示されている。海外標本では、支所スタッフの海外技術援助あるいは調査により集められた貴重な岩石・鉱物・鉱石標本が並べられている。これら国の内外の標本には極めて稀少価値の高いものが多く、見学者からも興味深く見学ができたと言われている。現在も支所で研究中の標本もあり、研究担当者からの直接の説明が生きている。

研究・実験室には、大型精密測定機器用のフリーアクセス床面（写真3）が設置される等の配慮がなされ各種ガス配管，ドラフト，実験台等も一新したクリーンな部屋となっている。また、地下1階に設けられた岩石薄片・研磨片作製室も、関連機器の整備と能率的な配置が行われ、作業環境も良好なものとなっている。図書室・庶務関係のスペースと雰囲気も良い。北海道支所は、広大な地域の地質，資源，環境の実態把握を初め、新しい研究テーマのもとに、それぞれの分野の融合を図りながら、個性ある研究課題に取り組んでいる。

JR札幌駅北口からも近いので、来札の折りには立寄

られますよう、お待ちしております。

(地質調査所北海道支所：〒060 札幌市北区北8条西2
丁目1番1 札幌第1合同庁舎内 ☎011-709-1811)



写真4 地質標本室(4階)、道内標本類の展示(左)とデスモスチルスの復元骨格と道外標本(右)

最近中国で発見された新鉱床

岸本 文男¹⁾

山西省の新発見ボーキサイト鉱床12ヶ所

山西省地質鉱産局は“第七次5ヶ年計画”の前半3年間、国家と同省の要求にもとづいて、同省に多い鉱物資源—ボーキサイトの探査に力を入れて大きな成果を挙げた。この3年間に発見されたボーキサイト鉱床は合わせて12ヶ所で、差し当たっての評価によれば、そのうち7鉱床の規模は大型の範疇に入り、5鉱床は中型に属する。これらの鉱床の賦存深度はいずれも比較的浅く、大部分の鉱床の立地条件はかなり理想的である。

ボーキサイト鉱は地質鉱産部が競って探鉱するよう要求している重要鉱種の一つであり、これらの大型・中型ボーキサイト鉱床を新たに発見した山西省地質鉱産局は“第七次5ヶ年計画”の後半2年間と“第八次5ヶ年計画”の前半3年間にボーキサイト鉱床の探鉱事業をさらに大きく展開するため、あらかじめ比較的よく整った後方基地を準備したが、それがボーキサイト鉱の鉱量を持続的に増加させるためにいちじるしく役立ったのである。

この12ヶ所のボーキサイト鉱床のうち、響義、南嶺上、寛草坪など10鉱床は現在すでに鉱区が設定され、それぞれの調査報告も提出済みであり、その探査総鉱量は

金属換算9,700万余tに達している。

王惠章(中国地質報 1989.3.20)

北部湾でまた噴油

最近、南海(南支那海)西部石油公司是資金を自己調達し、自らの力量を発揮して北部湾(トンキン湾)の瀾11-14構造の北断層地塊でまた一井の高生産性の可採石油・天然ガス井の鑿井に成功した。

この試錐井は瀾11-14北4井と呼ばれ、北海市西南方94km、水深40mのところを位置し、計画掘進深度は1,900mで、昨年12月21日に南海4号プラットフォームによって鑿井が開始され、今年の1月3日に無事1,900mに到達した。そして1月7日から同12日まで2油層に対する採油試験が行われ、原油777.4m³/日・井、天然ガス8,623m³/日・井という結果が出た。この瀾11-14北4井は瀾11-14北1井に引継がれて、また一井の高生産性石油・天然ガス井が生れた。この瀾11-14北1井によって、瀾11-14構造北断層地塊の貯留層の物理的性質が優れ(高孔隙率・高透水性)、原油が軽質で、天然ガスは重質成分の多いものであることが証明された。これは、非常に優秀な油田と言える。 袁維選(中国地質報 1989.3.3)

1) 元所員：〒152 東京都目黒区東が近1-23-21